史料紹介

山口県指定文化財 山田家本屋について

会員　三浦　孝

県指定文化財山田家本屋が県総合庁舎新築のため解体され、堅田家ゆかりの地湯野の周南市役所湯野支所移転跡地に再移築、平成一五年一〇月四日オープンしました。

この建物は、昭和三〇年県指定文化財保存顕彰規定による指定をうけ、昭和四〇年当時の徳山市に寄贈されて、建坪の約六割が徳山市体育館（現県総合庁舎）敷地内に移築されました。

今回の再移築については周防国分寺解体修理のため駐在中の文化財建造物保存技術協会技師の近藤技師の指導を受け厳密な考証によって建築当初の姿により近いものに復元されました。

そして、今まで公民館として使用されていたものを、移転後は内部に山田家ゆかりの古文書・短冊・古地図・什器及び建物の説明図等が展示され、学習に役立つように工夫がなされています。まさしく歴史に関心のある者にとっては有難いことだと思っています。

＊　＊　＊

山田家については、今まで神本正律氏などの調査研究があり蛇足かとも思われますが、同家の記録などから歴史のごく概略を参考にまでにまとめてみました。

山田家の先祖は小早川隆景の家臣で、安芸国三原地方に在住していて、堅田家創立の時同家の家臣になったと伝えられています。

関ヶ原合戦の敗北で毛利家は防長二州に減封されました。その後、寛永二年（一六二五）の領地替えで堅田家に従い戸田の地に移住しましたが、程なく洪水により溺死、家は断絶しました。

その後、家名を再興するために徳山藩亀谷家から五右衛門という人を迎えて「山田」を名乗らせました。しかし、この一家は労咳に冒されて次々に死亡し、二代目藤九郎も病に倒れ、再度家系が途絶えようとしましたが、唯一残された妹に徳地の原田家から婿の清左衛門を迎え存続することができました。だが妹も結婚五年余りで子供もできないまま病死し、亀谷系は絶えてしまいました。

当時、山田家は家屋敷を売払い、諸道具もなく、ただ運平（五右衛門）の署名が記された論語二冊を残すのみの赤貧だったと言い伝えられています。

翌年、清左衛門は後妻を迎え、鋭意家の復興に全力を傾注し、婿入り一〇年余りで現存屋敷の基本部分を復して移り住むことができました。この急速な復興は清左衛門の才能と努力によることは勿論ですが、実家原田家の支援も大きかったことが窺われます。

清左衛門と後妻との間に生まれた半平は、一二歳になると堅田家御側坊主として萩に召しだされ、成人後は勘定役に任ぜられて、三〇数年の間苦しいやり繰りを司りました。その間、米や銀子を差し出し、借金のため上方に走るなど大きな貢献をしております。

半平の長男多門も英俊な子で、一四歳で堅田家にあがり、御側役、御供頭、御用人座などの重役を勤め、寛政九年（一七九七）有栖川宮栄姫の毛利斉房へ降嫁の際には、主君堅田就正に従って御供の重責をはたしております。そして、文化年間（一八〇四～一八一八）には密用で再三上京を命じられるなど藩政にも尽力し、同四年（一八〇七）には堅田家一代家老にまでのぼりつめております。

また多門は、和歌・連歌・俳諧に秀で、勤務の余暇には、著名な歌人・俳人と同座・贈答・交際した多才の人で「南可」「発朶園」と号していました。

多門の長男吉之丞は、向学心旺盛で肥後時習館の高木紫溟、筑前甘掌館の亀井昭陽と相次いで入門して儒学を学び、その学才が評価されるようになりました。

その頃、本藩儒官の山根東湖が没し、嗣子の惣蔵が幼少だったので後見役として代勤を命じられました。儒官は山根家世襲であったため吉之丞は庶子として山根の姓を名乗り、名を「温」「東周」と号し、任官しました。やがて惣蔵が役年齢に達し儒官の役を譲ると、改めて一代儒元役として召抱えられました。

一方山田家では、吉之丞が二一歳の時次男郁之丞が誕生、兄が儒官後見役に召されて山根家を名乗ったため嫡子とされ、山田家を継ぐことになりました。

郁之丞も幼少から儒学・漢学・兵学や詩歌書画まで学び、国学・和歌・馬術に秀でていたといいます。

長男伊織が成人後は仕官を委ねて戸田に居住し、読書・吟詠と悠々自適な生活をしていました。やがて名声は次第に顕著になり、師事する人が多くなるに連れて学問や芸術関係者との交流も盛んになりました。また、兄東周を通じた諸士も加わって、山田家の来客の出入りは増加し多彩になってきました。

その結果、来客名士が書き残したり贈呈したりした書画・文書などが山田家に多く集まりました。

また郁之丞は、焼き物に興味をもち萩松本焼を参考にして、地元に登り窯を築き戸田焼（朝陽焼）を創めるなど、地区の産業振興に貢献したことも忘れてはならないものがあります。

＊　＊　＊

山田家家屋は、前記の通り基本部分は清左衛門によって享保六年（一七二一）に建てられましたが、その後順次改造・増築されていますが詳しい記録は見当たりません。

近世の武家屋敷の趣と民家風の構えを合わせ持ち、隠し部屋・筵天井・外からは開けられない回転式雨戸・座敷の刀隠しなど珍しい設備をもった茅葺きの重厚な建物は無一物から復興した山田家の隆盛を象徴しているようで一目見るだけの価値はあると思います。